言語学研究会の論文集・その2

言語学研究会の論文集・その2

ことばの科学

江苏工业学院图书馆
2 藏 书 章

むぎ書房刊　1989年

ことばの科学　2

定価　4,000円
（本体　3,884円）

1989年8月20日　印刷
1989年8月25日　発行

編　者　言語学研究会
発行者　布村　哲夫
印刷者　中田　[redacted]
発行所　むぎ書[redacted]
東京都文京区小石川4-12-12
電　話　03-818-5952
振　替　東京 5-27913
印　刷　船舶印刷株式会社
製　本　㈱井上製本所
　　㈲加藤紙器製造所
8201

『ことばの科学』第２集の発行にあたって

まずはじめに，ぼくたちの研究会のなかまであり，かつ先輩である上村幸雄の60歳の誕生のお祝いにささげられた，この論文集が，つつがなくできあがったことをよろこびたい。音声学者として，あるいは琉球方言の研究者として，あまりにも有名な上村幸雄の業績をここでいちいち紹介する必要はないだろうが，研究会のなかでの彼の役わりについては，ひとことかたっておきたい。言語学研究会は，40年のあいだに，日本語とかかわっていろんな領域でたくさんの仕事をのこしてきた。研究会の仕事をひたすらみとめたくない老大家も，伝統的な国語学への忠誠をちかって，研究会の方法に勇猛果敢なたたかいをいどみかける，ドン・キホーテ的な，わかい国語学者もいることだろうが，いまはもう彼らの権威で日本語の研究史から研究会の業績をおいだすことはできないだろう。だが研究会がここまで成長するまでには，いろんな思い出がたくさんある。そして，上村幸雄の存在とからんでも。

離合集散の大衆的な民間運動のなかで，言語学研究会はひとつの道をあきもせずあるいてきたのだが，その道がつねに平坦であったというわけではない。言語学研究会は，言語の研究という，ひとつの目的を追求する，自由な人間のあつまりであるのだが，メンバーのひとりひとりは，それぞれが小・中・高・大の教師であったり，まったくの失業者であったりして，現世から解放されることのない俗人たちである。ひとりひとりのメンバーが研究会のなかにそれぞれ自分の立場から利害をもちこんでくるのは，しごく当然のことであるだろう。しかし，研究会はメンバーのあいだの利害の衝突をまだ芽のうちにつみとって，組織を破壊へともっていくことはしなかった。メンバーのひとりひとりの，組織の利益を先行させる賢明さがそうさせたのにちがいないのだが，研究会のなかでの上村の活動は組織のまとまりをたもっていくために，たいへん有効であった。言語学研究会のなかでは，仕事のことでなにか問題がおこったとき，上村はいつも自分をころして，みんなの立場から発言していた。この組織者としての資質は，いまは沖縄での方言研究の組織者としての上村のなかにもよくあらわ

れている。研究会の方法論は上村の仕事に，なかんずく音韻論につよい影響をあたえているだろうし，上村の研究上の業績，とくにさまざまな音声学的な事実の発見は，研究会の方法論の正当さを確信的なものにしている。また，教科研・秋田国語部会の教師，仲野谷清，駒木勝一たち，明星学園での渡辺慎晤，内藤哲彦たちが上村から音声学の指導を直接うけていて，上村は教育実践と言語学とのむすびつきを具体的な実践をとおして主張している。毎年の冬の，瀬波での，教師のための，彼の音声学の講義もわすれられない。このような，さまざまな事実は，研究会の歴史をふりかえるにあたって，ぜひとも記述しておかなければならないことなのだが，この仕事は研究史をかく人にまかせるとして，いまここでは上村の，研究会の組織上の役わりについて，事務局長としてのぼくは，メンバーを代表して，感謝の気もちをのべておきたい。

さて，ぼくの予告では，この第2集の出版は2年まえの，87年に実現しているはずである。それがいままでのびのびになってしまったのは，ぼくをふくめて，わか手のメンバーの力不足によるのである。指名された，執筆者のなかからいく人かの脱落者がでてきて，出版が不可能になってしまった。ぼくは読者諸兄にうそをついたことになって，おわびしなければならない。つぎの第3集は10月に出版する予定であって，準備はととのっている。またうそをつくことにはならないだろう。つづいて，この論文集に掲載されている論文の内容を，順序に，かんたんに紹介しておこう。

「なかどめ」という題の，最初の論文は研究会のなかにある構文論グループの集団研究である。構文論グループは女グループと男グループとにわかれているが，この論文の執筆者は男グループである。ひとつの課題をみじかい期間のあいだに，ある高さで解決するためには，集団をくむのがいちばんいい方法である。たとえば，1万枚のカードをあつめるために，ひとりでやれば，1年かかる仕事が，集団でやれば，1か月もかからない。この「なかどめ」の集団研究では，教師にはなつかしい名前の山内和夫がカードづくりの仕事をひきうけてくれた。しかし，エゴイズムに毒された俗人のあつまりであれば，仕事にたいする無責任さは必然的におこってくるだろう。それを克服するためには，グループにくわわる，ひとりひとりの自覚はかかすことのできない条件になる。研究がふかまれば，ひとつのテーマをひとりの研究者でしらべるというようなことは，まず不可能になってしまうだろう。とすれば，集団研究は未来の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

研究のあり方であるだろう。いってしまえば，構文論グループのこの作業は，観念の世界のなかで現実を克服できるか，ぼくたちがためされているようなものである。

ところで，この論文では，動詞の第二なかどめにかぎって，この形の意味が体系的に記述されている。日本語指導の世界で「てフォーム」とよばれている第二なかどめの研究は，おおくの国語学者によって手がけられているが，ほとんどがいくつかの意味のら列におわっていて，そのいくつかの意味のあいだの関係は放置されたままになっている。この論文でも，第二なかどめの形がいいあらわす，いくつかの意味が，その表現形式とともに，発見されているが，ここで大切なことは，第二なかどめがいいあらわしている，いくつかの意味を体系づけているということであるだろう。第二なかどめが表現する意味体系のなかで，いちいちの意味を再発見しているということでもある。そして，この論文では，第二なかどめの表現する意味の，基本的な特徴をふたつの動作の複合性のなかにみていて，継起とか，同時とかいう，時間的な関係は，それにつきまとっている，副次的なものとしてとらえている。複合性の性格の観点から意味の体系がくみたてられているのである。複合性についていえば，二，三の国語学者がすでにうすうすと気づいていることであっても，明確な概念のなかにとらえられてはいないし，まして時間的な関係と複合性とのかかわりはいままでの論文ではなんら説明されてはいない。とすれば，この論文はやはりあたらしい問題にはいりこんでいるといえるだろう。あたらしい意見をだすことがすでに存在する意見への批判でもあれば，研究の歴史にはあえてふれないでいる。

比毛博による，2番目の論文「接続詞の記述的な研究」は，88年の冬の，瀬波での，教科研国語部会の研究集会に提出した，彼の報告「接続詞の体系的な研究」をいくらか補足訂正したものである。この論文集に掲載するにあたって，題名の「体系的な」を「記述的な」にかきかえて，自分の研究が体系性の発見にまでいたらなかったことを告白している。接続詞の体系性は，いちいちの接続詞の意味と機能とを全体にわたってあきらかにしないかぎり，みえてこないとすれば，比毛は，接続詞の意味と機能とをこまかくしらべあげる，この論文では，接続詞の体系性の発見をめざして，そのための前提条件を確立しようとしているのだろう。このことは比毛の論文の価値をいささかもひくめはしない。いちいちの接続詞の意味と機能との詳細な記述は，いままでの研究にはみうけられないし，日本語指導の要求にぴったりこたえていて，その実

用的な価値はきわめてたかい。ぼくはこの論文の利用を教師諸兄におすすめしたい。こんなふうに比毛の論文を評価するが，この論文に理論的な寄与がかけているといっているわけではない。言語学からテキスト論への展開への手がかりがいたるところにちりばめられていて，テキスト研究の具体的なあり方をおしえてくれる。

3番目の論文「動詞の活用形・活用表をめぐって」は，いく人かの研究者たちによって日本語の動詞の活用表がつくられてきた，その歴史的な過程を，その本質の追求とともに，あきらかにしようとしている。動詞の形態論を専門にする鈴木重幸にとってはさけてとおることのできない問題であるだろう。すでに明治のはやい時期に現代日本語の研究は伝統的な四段活用を放棄していて，ヨーロッパの近代言語学の線にそって，あたらしい活用表をつくっている。鶴峯戊申，馬場辰猪，大槻文彦からはじまって田丸卓郎，佐久間鼎にいたるまでの研究，さらに戦後の宮田幸一，三上章，三尾砂の研究など，日本のオーソドックスな言語学のながれは，動詞の活用表の確立に力をそそいでいる。言語学研究会の，なかんずく鈴木重幸の動詞の研究は，この研究史のながれのなかに位置づけなければならないのだろう。

ところで，言語学研究会がこのながれになにかを寄与したとすれば，それはなにか，鈴木はここで考えこまないわけにはいかない。というのは，おおくの国語学者，日本語教師たちは，言語学研究会の提出した活用表のくみたて方を無条件的に承認しながら，その修正にのみ奔走して，なぜそのような活用表をくみたてなければならないのか，ということへの反省がまったくかけているからである。このことは，正当にも助動詞を動詞の語尾とみなす山田孝雄，松下大三郎の研究が，なぜ四段活用から脱却して，テンス・ムードの体系としての活用表をくみたてることができなかったか，ということについての問題をとくことでもあるだろう。鈴木はこの疑問をとこうとして，言語学研究会による，動詞の形態論的なカテゴリーとしてのテンス・ムードの確認をとりあげている。そして，そのとき，鈴木は，動詞の文法的な形をめぐる，奥田靖雄の考察を例にとりあげている。このことが，つまり文法的なカテゴリーへの考察が過去の研究者から，そして現在の研究者から言語学研究会を区別していると，鈴木はみるのである。したがって，言語学研究会の，動詞の活用表が B.ブロックの影響のもとに成立しているという，一部の人たちのみ方はなりたたないだろう。一般的にいって，言語学研究会の言語学はアメリカの記述主義とは無縁である。しかし，現在の言

語学研究会はそこにとどまってはいないだろう。文のモダリティー，テンポラリティーの，動詞への凝集としての，動詞の活用，述語のベースとしてはたらく動詞の活用，このことの研究がこれからの言語学研究会の課題となってくるのだろう。

4番目の，狩俣繁久・島袋幸子の論文は，言語学研究会の形態論的な研究を土台にして，沖縄北部方言のひとつ，今帰仁方言の動詞の活用を記述している。彼らは標準語の動詞の文法的な形（ここではアスペクトとヴォイス）と今帰仁方言のそれとをくらべて，基本的にはひとしいとしながらも，それらのあいだのちがいをみいだす。標準語の形の，方言への機械的なあてはめからぬけだしていて，方言研究をあたらしい段階へひきあげている。なかでも，痕跡相（結果相）が述語にあらわれてくるときの文の構造。彼らは今帰仁方言の可能の形には実現の意味がかけているというが，論理的には《実現》は《可能》に先行しているはずであって，もっと観察をふかめてほしいと思う。いずれにしても，沖縄方言のアルカイックな性格をあきらかにすることに成功すれば，この種の方言研究は，まちがいなく日本語の歴史的な研究にあたらしい，方法論上の問題をなげかけることだろう。

つぎの，5番目の，津波古敏子の，首里方言の動詞の不完成相の研究は，この点ではおもしろい問題をなげかけている。つまり，彼女によれば，首里方言には不完成相の形がふたつあって，そのうちのひとつは《臨場性》につきまとわれているのである。狩俣繁久らもこの事実を今帰仁方言のなかに気づいていて，津波古の結論はたぶんまちがいないだろう。そして，津波古のほうは，不完成相の，この意味特徴を古風な不完成相とみて，「おもろさうし」における不完成相の使用のばあいにあてはめている。また，奄美方言の動詞の終止形になぜふたつの語尾があるか，という問題の解決へとすすんでいく。おそらく，目のまえでおこっていることを話し手がみている という《臨場性》はテンスとアスペクトとのつなぎ目であるだろう。これからの琉球方言の研究は，戦後の記述主義的な研究からぬけだして，日本語の歴史的な研究へと成長していくのだろう。津波古，狩俣，島袋の研究はこのことを予告している。

6番目の，宮島達夫の論文「動詞の意味範囲の日中比較」では，ふたつの動詞がおなじ，ひとつの客観的な動作を意味のなかにとらえていても，それらの動詞の語彙的な意味はそれぞれがひとつの動作の，ことなる段階（局面）をとらえていて，かなら

ずしもひとしくはならない，という事実についてふれている。この，ふたつの動詞というのは，ひとつの言語における，ふたつの動詞であっても，ふたつの言語における，対応する，ふたつの動詞であっても，さしつかえないだろうが，宮島のばあい，おなじ動作を意味にとりこんでいる，日本語の動詞と中国語の動詞とをくらべて，動作のどの段階をきりとってくるかということから，これらの意味にちがいがおこっていることを論じている。宮島は，ひとつの動作を継起的に通過していく，いくつかの段階の複合としてとらえて，どの段階を動詞が語彙的な意味のなかにとりこんでいるか，ということで，民族語のあいだにちがいがあるとするのである。たとえば，他動詞のばあいに，動作は対象にはたらきかけていく段階と，その結果として対象に変化がおこる段階とにおおきくわけることができるのだが，言語によっては動詞が第一の段階のみをとらえているばあいと，第二の段階をとらえているばあいとの，ふたとおりがある。おなじ動作をとらえているとしても，中国語のばあいでは，動詞は対象にはたらきかけていく，動作の段階をとらえているが，日本語では対象へのはたらきかけとその結果としての変化までをとらえている，というようなちがいがある。

ところで，ここでの，語彙的な意味における対象（動作）のとらえ方のちがいは，アスペクト的な対立，あるいはアクチオンス・アルト Aktionsart における対立に照応している。つまり，中国語では，動作によってなんらかの結果が達成される瞬間をいいあらわすアスペクトの形式，あるいはアクチオンス・アルトの形式があって，対象へはたらきかけていく動作のみをあらわす，マークされていないアスペクトの形式，あるいはアクチオンス・アルトの形式に対立している。とすれば，全体として中国語と日本語との動詞の語彙的な意味のちがいは，アスペクチュアリティーの体系のくみたて方のちがいであると，みなすことができるかもしれない。いずれにしても，言語の対照的な研究がもとめられている今日では，宮島のなげかける問題は，動詞の研究の中心的な課題になるだろう。

おしまいの，渡辺慎晤の論文は，英語における動詞の語彙的な意味をアスペクチュアルな意味との相関関係のなかで一般化して，動詞を動作動詞と変化動詞と状態動詞との，みっつの系列へと分類する。従来の英語文法での，動作動詞と状態動詞との，ふたつの系列への分類がここでは修正をうけている。渡辺は，その根拠として，動作動詞と変化動詞とはひとしく進行相の形をも，完了相の形をも採用することができる

のであるが，そのとき実現するアスペクチュアルな意味はかなりおおきくちがってくる，という事実をあげている。

英語において動詞をおおきく分類するばあい，変化動詞をとりだす必要があるか，ないかということは，いまはとわないとして，変化動詞という概念の導入は，たとえそれが日本語の文法指導のなかで準備されるべきものであるとしても，ぜひとも必要なことであるだろう。日本語の，いわゆる変化動詞は，不完成相の形においては完了（パーフェクト）の意味を実現しているし，動作動詞は進行の意味を実現していて，日本語では，動作動詞と変化動詞との分割はぜひとも必要なのであるが，英語では，変化動詞と動作動詞との対立は，状態動詞とくらべて，それほどきわだっているわけではない。したがって，動作動詞を動作性のものと変化性のものとにわければ，すむことであるかもしれない。しかし，これらが完了相の形を採用するばあい，アスペクチュアルな意味がかなりことなってくる。変化動詞の完了形は resultative な性格をおびてくるのである。こんなことを根拠に，渡辺は，英語動詞において動作動詞から変化動詞を区別するのであるが，彼が，意味論的なカテゴリーとしての《変化》と《状態》とを英語がどのように表現しているか，というようなかたちで問題を提起するとすれば，日本語と英語との対応の関係があざやかにうきぼりにされてくるだろう。宮城教育大学で英語教育論を講義している渡辺は，たぶん，この課題を解決するための前提をこの論文で設定しているのかもしれない。日本語にも状態動詞があるし，英語にも変化動詞がある。このことを承認したうえで，日本語の変化動詞と英語の状態動詞（状態形容詞）との対応の関係をあきらかにすることも必要なのだろう。渡辺の，この研究は，いずれはそこへすすんでいくのだろう。

以上でぼくの紹介はおわりにするが，いちいちの論文の内容はぼくなどの力ではとうていとらえようのないひろがりをもっていて，不十分さはあたりまえのこととしても，よみまちがいのおそれをおおいに感じている。ぼくのよみちがいへの指摘などをもふくめて，この論文集への批評なり，感想なりを読者諸兄がぼくのほうによせてくだされば，たいへんうれしくおもう。日本の言語学を，かりものでなく，ほんとうの意味で国際的なレベルにたかめるためには，いまは日本の言語学者たちの，いろんなかたちでの協力が大切なのだろう。

この論文集の編集は，上村幸雄の60歳の誕生をいわうということで，沖縄大学の津

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ことばの科学 2　もくじ

『ことばの科学』第2集の発行にあたって…湯本　昭南　1

なかどめ——動詞の第二なかどめのばあい——……
言語学研究会・構文論グループ　11
新川　忠・樋口文彦・比毛　博
山内和夫・湯本昭南

接続詞の記述的な研究……比毛　博　49

動詞の活用形・活用表をめぐって……鈴木　重幸　109

今帰仁方言の動詞の文法的なカテゴリー……狩俣　繁久
——アスペクトとヴォイス——　島袋　幸子　135

不完成相につきまとう臨場性……津波古敏子　159
——首里方言のばあい——

動詞の意味範囲の日中比較……宮島　達夫　179

英語における動詞の語彙的な意味とアスペクト……
渡辺　慎晤　199

上村幸雄の履歴，著書と論文の目録……227

なかどめ

——動詞の第二なかどめのばあい——

言語学研究会・構文論グループ

（1） ふたつの動詞をつなぎあわせるとき，日本語ではしばしば先行する動詞に連用形の形をとらせる。べつのいい方をすれば，述語の位置にあらわれてくる定形動詞のまえに，べつの動詞を配置するときには，その，べつの動詞はしばしば連用形の形をとらされるのである。こうすることで，動詞の語彙的な意味のなかにさしだされる，ふたつの動作・状態のあいだには，一定の意味的な関係がつくりだされる。ふたつの形容詞あるいはふたつの名詞が連用形によってくみあわされるときにも，おなじようなことがおこっている。わたしたちは，ふたつの動詞，ふたつの形容詞，ふたつの名詞が連用形あるいは《てフォーム》によってくみあわされるとき，わたしたちの用語をつかっていえば，第一なかどめあるいは第二なかどめによってくみあわされるとき，そこにどのような意味的な関係が生じてくるか，あきらかにしようと思う。ただし，この論文の記述は動詞の第二なかどめの使用のばあいに限定するだろう。動詞の第一なかどめの使用のばあいは，つぎの『ことばの科学』第3集に掲載する。

まずはじめに，用語上のことでおことわりをしておかなければならない。この論文では，明星学園の『にっぽんご　4の上』，鈴木重幸の『日本語文法・形態論』にしたがって，連用形のことを《第一なかどめ》とよび，その連用形に接続助詞の「て」のくっついた形を《第二なかどめ》とよぶことにする。これらの形が《なかどめ》ということでひとつにまとめられて，つぎに《第一》と《第二》とにわけられる。そうすることの理由は，連用形とその連用形に「て」のついた形とは，派生的な関係によってむすばれていて，そこには意味的にも機能的にもかさなりあいがみられるからである。《なかどめ》という用語はそこで採用されている。そればかりではなく，第一なかどめにはみられない意味特徴が，第二なかどめにそなわっていて，そこでふたつの形は対立している。第二なかどめの「して」を「し」と「て」とに分解しながら，

うらない師的にその「し」の文法的な意味，「て」の語彙的な意味をさがしもとめることは，まずできない相談だろう。意味・機能的には，「して」は「し」と「て」との合成ではなく，「して」がひとまとまりになって，「し」に対立している。

「し」とならべて，「して」を動詞の文法的な形のひとつとしてとりあつかうべきである。このことは，最近の日本語教育界も，第二なかどめのことを《てフォーム》とよんで，おおむね承認しているようである。しかし，外国人むけの日本語文法の教科書は，動詞や形容詞からきりはなしたところで，「て」の意味をあつかうという，従来の学校文法のやり方からぬけだしているわけではない。動詞や形容詞の語彙的な意味をきりすてたところで，「て」の意味をもとめるという，ふるいやり方は，限界をこえた，不当な抽象化であって，それがまだ日本語教育のなかでもいきのこっている。あたらしい事実の発見から出発してはいない日本語学が，従来の伝統的な国語学の考え方をのりこえることができないのも，当然のことだろう。あたらしい研究がかけているところに，なまえをかえてみても，内容があたらしくなるわけではない。

ふたつの動詞をなかどめの形でつなぐばあい，そこに生じてくる意味的な関係が動詞の語彙的な意味のはたらきかけのもとに成立しているという事実は，動詞の「して」の形を連用形と接続助詞の「て」とに分解して，もっぱら「て」の意味をもとめていくというし方では，みえなくなってしまうだろう。ふたつの動詞がなかどめの形でくみあわされているばあいを，ふたつの形容詞がおなじなかどめの形でくみあわされているばあいとくらべてみると，意味的な関係にたいする，語彙的な意味の干渉はすぐにあきらかになる。ふたつの動作のあいだの関係がふたつの性質のあいだの関係にひとしくなるわけがない。このような根拠で，わたしたちは「はなし，きき，よみ，かき」のような，動詞の文法的な形を動詞の《第一なかどめ》とよび，「はなして，きいて，よんで，かいて」のような，動詞の文法的な形を動詞の《第二なかどめ》とよぶことにする。こうすることで，「して」を「し」と「て」とに分解することを拒否するのである。連用形の「し」の形を《ます形》とよびながら，「して」の形を《てフォーム》とよぶなづけ方よりも，わたしたちのなづけ方のほうがはるかにすぐれているだろう。《ます形》というよび方は連用形の「し」にそれ自身の文法的な意味と機能とがそなわっていることを承認してはいないし，こうすることで「し」と「して」との統一性をきりすててしまう。

わたしたちのなづけ方からは，ひとつの品詞の第一なかどめと第二なかどめとの使

用のばあいをひとつの視野のなかにおさめて，これらの形の意味・機能上のちがいをあきらかにすることがもとめられるだろう。ところで，述語としてあらわれてくる定形動詞のまえに配置される動詞は，なかどめの形のほかに，「しながら」「してから」「したり」というような形を採用することができる。そして，これらの形は，それぞれがことなる意味的な関係を表現しながら，機能的に統一される，動詞の変化形のパラダイムをつくっているようである。いま，かりに，これらを表にまとめて，それぞれの形になまえをあたえておく。もし《連用》という用語が《終止》や《連体》とならんで，動詞の，文のなかでの機能のひとつを表現しているとすれば，これらの形のすべてを《連用形》とよぶことがゆるされるだろう。

基本形	第一なかどめ	第二なかどめ	同時形	先行形	共存形
hanasu	hanasi	hanasite	hanasinagara	hanasitekara	hanasitari

しかし，わたしたちは，ここでは，このパラダイムのなかでの第一なかどめ，第二なかどめの位置を全面的にあきらかにすることはできない。さらに，第一なかどめ，第二なかどめの構文論的な機能を全面的にあきらかにする作業もさしひかえるだろう。そして，課題は，なかどめによってくみあわされる，ふたつの動詞，ふたつの形容詞，ふたつの名詞のあいだに生じている，意味的な関係をあきらかにすることにとどめるだろう。わたしたちがこうしなければならないのは，わたしたちの研究が最初の段階にあることを意味している。まずはじめに，動詞のばあいではなかどめの形がどのような意味をもっているか，しらべることにする。

（2） 現在の文法論では，第一なかどめと第二なかどめとは，その意味と機能とにおいて，ことならないものであると考えられている。ふたつの動詞がなかどめの形でくみあわされるばあい，そこに成立する意味的な関係は，なかどめの形が第一であろうと，第二であろうと，かわりはないとされているのである。このことは，なかどめの研究にむけられた考察のなかで，動詞の第一なかどめと第二なかどめとの意味・機能上のちがいをさがしもとめるこころみがはじめから放棄されている，という事実のなかによく表現されているだろう。なかどめの研究のこのような状態は，研究者のがわの方法論上の欠陥からおこってくるのか，それとも第一なかどめと第二なかどめと

のあいだに文体論上のちがいのほかになにものも存在しないという事実に照応しているのか，いまただちに決定することは困難だろう。だが，（わたしたちは，この論文では，形がちがえば，意味がちがうという原則にもとづきながら，第一なかどめと第二なかどめとのあいだの意味上のちがいをさがしもとめていくことにする。）したがって，動作・状態をさしだしている，ふたつの動詞がなかどめの形でくみあわさっているときには，第一なかどめのばあいと第二なかどめのばあいとでは，さしだされる意味的な関係がことなっている，という仮説にもとづきながら，研究をすすめるだろう。

ふたつの動作・状態が動詞の第二なかどめの形でむすびつけられると，そこには主要な動作・状態と副次的な動作・状態との，従属的な関係が生じてくるのであるが，第一なかどめの形でむすびつけられると，この種の従属的な関係は生じてこない。いいかえるなら，従属的な関係のなかにある，ふたつの動作・状態は第二なかどめの形で表現されているのにたいして，非従属的な関係のなかにあるそれは，第一なかどめの形で表現されているのである。このことは，第一なかどめと第二なかどめとをひとつのパラダイムのなかで対立させることの必要を生じさせるだろう。基本的には，すくなくとも一般的な傾向としては，動詞の第一なかどめがふたつの動作のあいだの非従属的な関係を表現しているとすれば，その第二なかどめは従属的な関係を表現していると，みなさなければならない。おそらく，通時論的にも，共時論的にも，こうしなければ，第二なかどめの成立と存在の根拠はみいだすことができないだろう。マークされていない第一なかどめが《非従属》と《従属》との，ふたつの関係を未分化のままに表現していたとすれば，そのうちの《従属》の関係のみを表現するために，マークされた第二なかどめの形がつくりだされてきたとも考えられる。いずれにしても，第一なかどめから第二なかどめが派生することによって，ふたつのなかどめの形はそれぞれがことなる意味を表現するようになったのである。第一なかどめと第二なかどめとを同義的なものとみなして，そのあいだに《ふるさ・あたらしさ》，使用の範囲のちがいのみをみようとする，文体論的なアプローチは，かぎられた範囲でのみ有効性をたもっている。じっさいに，使用されている第二なかどめを第一なかどめにとりかえることができないばあいがしばしばあるし，もしおきかえることができるとしても，関係的な意味をかえてしまうだろう。

（3） 第一なかどめのばあいはしばらくのこしておいて，第二なかどめがふたつの動詞のあいだにどのような関係をつくりだしているか，しらべてみることにしよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com